一　太行の麓をしのんで——生体解剖——

野田　実
（宣撫・中尉）

一九四五年四月のことであった。炭坑で名高いあの河南省焦作鎮に私の所属していた旧第百十七師団野戦病院が駐留していた。

当時すでに一カ月ほど前から、周辺の部隊の主力は、「老河口作戦」のため動いていたし、私の病院からも、この作戦のために約三分の一の兵員が参加していた。

また、一方、沖縄の戦局は、すでに決定的段階にはいったことが報ぜられており、この作戦が終わったら、師団は移動するだろうという噂さえ、どこからともなく伝えられていた。

病院には、私を含めて院長以下五名の軍医が残留していたが、新しい入院患者もほとんどなく、病院はひっそりとしており、重苦しい不安な空気がただよっていた。連日連夜、将校倶楽部に入り浸たり、酒と女で、官能がすでに麻痺されたように荒さんでいた。私は、このような不安と焦燥のなかで、もっと強い刺激を求めていたのだ。

ちょうどこうした時期に、私は、突然、病院長軍医少佐丹保司平に呼ばれた。

「じつは明日、軍医の教育をやりたいのだが、君は昨年十月、鄭州の十二軍司令部がおこなった軍医

教育に直接参加して、経験済みだし、あの要領でやってくれればいいのだ。憲兵分遣隊から——どうせ殺すのだから、病院で何か試験に使って処分してくれてもよい——という話があり、いい機会だから、軍医たちの手術の練習のために教育をやろうと思っているのだ。戦地に来ている軍医は、内科だろうが、外科だろうが、救急の手術や盲腸の手術は、いつ、どこでもできるようにしておかねばならぬからなあ……。」

私は、病院長のこの言葉を聞いたとき、しめたとばかり、即座に「承知しました。」と引きうけていた。というのは戦地に来て以来、噂に聞く「生体解剖」を、一度やってみたいと思っていたが、去年鄭州のときは、傍で見学していただけで、自分でやれなかったのが残念でたまらなかったからである。

私は、医務室に引きあげてくると、すぐ実施計画を作って、病院長に提出した。そして、その日のうちに準備を整え、とくに内科の新田軍医中尉と高岩軍医少尉には、あらかじめ手術書や解剖書を見て研究しておくように言っておいた。

翌日午後、憲兵が一人の中国人を連行して来たことを、衛兵が知らせてくると、私は、外科の水谷見習士官に、手術室に入れておくように命じた。

私は、何食わぬ顔をして、手術室のドアを開けてはいった。中国服を着た男の一人が憲兵であることは、すぐわかった。彼は、水谷と顔見知りであるとみえ、何か話をしていたが、私がはいって行く

ハァ」と短く呼吸をしだした。

呆然としている水谷に、私は、「もっとクロールエチールをかけろ。」とどなった。彼は気がついたようにあわてて、クロールエチールの栓のバネを押さえた。クロールエチールは、細い線状をなしてガーゼに吸いこまれてゆく。蒸発する麻酔薬の強い臭気が私の鼻をついた。やがて、全身に入れていた渾身の力が抜け始め、麻酔がかかり出したのがわかった。私はホッとして麻酔薬をエーテルに替えさせ、衛生兵に両脚を手術台に縛りつけさせた。しかし私は、完全に麻酔がかかるまでは皆に手を放させなかった。

呼吸もだんだんと元に回復し深い麻酔にはいったと見るや、私は麻酔係を森下衛生軍曹に交替させ、水谷に、手術開始のため手を洗い始めるように言った。衛生兵は隣りの準備室に用意しておいた手術機械を運び込んでいた。

物珍らしそうに見ていた憲兵が、「もうこれで何をされても、本人は分からないんですか?」と尋ねるので、私は何も分からないどころか、本人が知らないうちに生命がなくなってしまうのだから、これこそ本当の、極楽往生ってやつさ。銃殺され苦しんで死ぬより、この方がよっぽどましだよと、せせら笑うと、憲兵もつられてニタリとした。

私は衛生兵に手伝わせて脚の縄を解き、中国人の着ていた被服いっさいをはぎとり、素裸にした。かつて、よほど手痛く拷問を受けたのであろう、背中に薄紫色をした数条の傷痕が、いたましく残っていた。私はそんなことにはとんじゃくなく、ふたたび足を縛りつけさせた。しかし、はじめ感じた

ように、この人が、その肩や背中の筋肉の恰好からして、小さいときから野良仕事で鍛えた、農民の人には間違いないと思った。その人は今や深い麻酔におちいり、寝息をたてて手術台の上に横たわっている。

やがて三人の軍医は、手術衣を着けて、つぎつぎにそれぞれの定位置につき始めた。このとき私の頭の中に、去年鄭州の十二軍直轄兵站病院の中で、一人の抗日戦士に対しておこなわれた、「生体解剖」が、まさに開始されようとしたときの印象的な情景がありありと蘇って来た。

そのとき私は、固唾を飲んで、二〇名ばかりの被教育者軍医将校とともに立っていた。突然、その教育の教官として派遣された、北京第一陸軍病院の長塩軍医中佐は、「気をつけ。」と声をかけ、われわれに不動の姿勢をとらせると、その教育を指導した十二軍軍医部長川島清軍医大佐に対し、「ただいまより開始します。」と、報告した。そして長塩は、全身麻酔をかけ完全に意識を奪った、この生きた人間に対して、病理解剖のときにおこなう死者に対する儀礼をまねたのであろうか、「敬礼」と号令をかけた。なるほど長塩は味のあることをやるなあ、と思いながら、頭をさげたことを、私はいま、まざまざと思い起こしたのである。

新田と水谷は一番大きな被布を広げて、その人の全身に被いかぶせた。

新田は、

「もう医者になって盲腸の手術は何回となく立ち合って見て来たが、自分でやるのは今日が初めてでネ。」と言いながらメスをとった。去年の暮、学校を出て、つい二、三カ月前、この河南の地に赴任

して来た、まだ二十四、五歳の学徒出身の高岩軍医は、これまで手術らしい手術もしたことがなく、口を堅く閉じて緊張した顔つきをしている。

水谷は、盲腸の手術ぐらいとばかり、気軽に私に対して、

「それじゃ始めてもいいですか。」とうながした。が、私は「ちょっと待て。」と押さえると、長塩の例にならって、「気をつけ。」と不動の姿勢をとらせ、病院長に対し、「ただいまより開始します。」と報告した。

彼は横柄に軽くうなずいた。

私はさらに、「敬礼」と声をかけると、無惨にも今麻酔をかけられ意識を失わせられたこの一人の、厳然として生きている中国人に対して、私が真先に頭をさげた。皆は、ハッと一瞬緊張した面持ちで私につづいて頭をさげた。あたかも、「皇軍軍陣医学の尊い犠牲者」と思いこませるために。

軍人の父を持ち、生まれ落ちたその日から、天皇教と武士道精神を叩き込まれ、日本軍国主義の坩堝の中で育った私には、こうした行為を得意がり、こうしたしぐさが骨の髄まで滲み込んでいた。憎憎しいまでに偽善を装いつつ、「敬意」を表するしぐさと、実際おこなうこの人道上ゆるすべからざる凶悪な行為の対照、これこそ日本武士道の一つの表徴であったのだ。

「教育」は、まず最初、新田が執刀者となり水谷が指導しつつ、高岩を助手として、右の下腹部で一〇センチばかり腹を切り開き、型のごとく盲腸の手術がおこなわれた。摘出切除された虫様垂（盲腸）は、みみずのように細く、まったく健康で異状はなかった。

つぎに、こんどは、水谷が執刀者となり、新田と高岩が助手となって、みぞおちのところから、臍の下まで約三〇センチにわたり、腹の真ん中を切りひらいて、内臓の点検が始まった。水谷は腹の中に両手を突っ込み、大網膜をよけつつ胃を探り始めた。やがて腸をかきわけて、肝臓の裏側にある青黒い胆嚢を露出させて皆に見せた。皆がいっせいにのぞき込んだ。

生きた人間の内臓の、生臭いにおいがプンと私の鼻に匂って来た。私には、このにおいは心地よくさえ感ずるのだった。

このとき、私がかつて河北省の保定にいた当時、憲兵隊の藤木大尉が生きた人間の健康な肝が万病に効くそうだから、何とか手にはいらないかと、私に聞いたことを思い出した。

憲兵が私の腰のあたりをつっ突くので、気がついて振りかえると、彼はやや背ざめて、「私はちょっと忙しいので、今日はこれで失礼しますが、後はよろしくお願いします。」と倉皇として手術室を出て行った。

やがて、内臓の点検を終わり、ふたたび腹膜を閉じ、縫い合わせた。私は被布の下に手を回し、脈をさぐってみたが、やや弱く感じられるが大した変化はなく、森下にエーテルの滴下をもう少しゆるめるように言った。

こんどは私と高岩、水谷と新田がそれぞれ組んで、右腕と左大腿を切り落とす手術が、同時に、この一人の生きた人間にたいしておこなわれるのであった。私も手を洗い、右腕と左脚の根元で止血帯をかけさせ、型のごとく皮膚消毒をさせた。

私は下三分の一のところで全範囲にわたって皮膚切開を加え、皮膚を剝離してやや上へまくりあげた。人間の太股を一気に骨のところまでザクリと切りひらく、外科医でなければ味わうことのできぬあの触覚を、私は高岩に味わわせてやろうと思って、彼に大きな切断刀を持たせた。そして、刀と刀をもった腕で大腿を抱きかかえるようにしてと、私は恰好を作って見せながら、このようにザクリと一気に切るのだ、と彼に教えた。

切断台(面)がギザギザ切りこんでは、止血のとき血管を探すのに苦労するから、サッと思い切って全周囲にわたって、一つの平面のように骨のところまで筋肉を切りひらくのだと、かさねて注意した。

衛生兵に足先を持ちあげさせておくと、高岩は、私が言ったように、勢いよくグルリと全周囲にわたって軟部組織を切り落とした。

鮮血が一時にドオッと滝のごとく流れ落ちた。伸びていた筋肉が、ピクピク痙攣するように収縮しながら切り離されていった。

高岩はあわてて、止血鉗子で止血しようとしたが、私は、

「そんな血は、どうせ出てしまうのだからほうって置け。」と言い放つと、手早く筋肉を両手でかき分けて、大腿骨に付着している筋膜骨膜とを剝離し始めた。白い大腿骨を露出させると、私は何枚も重ねたガーゼで、筋肉の断端を包むようにして上部に吊りあげ、骨鋸で大腿骨をなるべく上のほうで切り落とすように、高岩に指示した。

ギイギイと鋸がきしり、切られて行く骨のあいだに鋸が食い入り、思うように鋸が動かなくなった。

私は、足先を持っている衛生兵に、切っている部位が、ひらくように、足先を少しさげるように言うと、高岩は、また勢いよく、鋸を動かしはじめた。そのとたん、大腿骨が切断された。そのはずみに、足先を持っていた衛生兵は、大腿の重みで、太股を、ドサリと、タタキに溜っていた血の上に落としてしまった。

血しぶきが、私と高岩の、サンダルをはいた素足にベットリ飛び散った。そんなことにはおかまいなく、私は高岩に手伝わせて、説明しながら、主要な血管を結紮し始めた。

「とくに神経を処置するときは、普通の場合、あとで、義肢をつける関係上、なるべく上のほうで神経を引っぱり出して、切り直して置くこと、そうしないと義肢をつけると痛むからだ。しかし、今日は、そんな心配はいらないがネ……。」

と先輩ぶって高岩に教えた。

骨筋にやすりをかけ、そこの処置をすませると、止血帯を徐々に取りはずした。二、三本の細い動脈から、勢いよく出血して来たがこれを結紮した。

ガーゼで切断面を軽く拭うと筋肉の切断面からジワリジワリと出血して来たが、「こんなものは縫合すれば止まる。」と、私はいいながら、私が手伝って骨端を周囲の筋肉で包むようにして、高岩に縫合させていった。

左大腿の切断術を終わって二人はホッとしながら、真っ赤な鮮血にぬるぬるになった手を、真っ白